

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】春日 あゆか

【所属】(助成決定時) 大阪市立大学大学院文学研究科 / (現在) 広島大学大学院総合科学研究科

【研究題目】近代イギリスと環境——煤煙問題にみるネットワークと対立構造

【研究の目的】(400字程度)

現代の環境問題では利害関係の対立とともに、何が「真実」なのかをめぐり、対立する双方の立場が科学的な根拠を提示する、「真実」の衝突ともとれる現象を観察できる。本研究は、産業革命を経て環境・汚染問題が深刻な問題だと認識され、その解決に行政、社会運動、科学や技術が関わるようになるイギリス近代を対象とした事例研究を行うことで、環境・汚染問題の建設的な政策形成を阻む要因について検証を行うことを目的とした。

本研究では19世紀半ば(1830-1870年)の煤煙問題に注目し、産業界、煤煙対策運動という枠組みを再考し、それぞれの立場の中の意見の多様性を考慮したうえで、同時代の人々がこれを単純な二項対立として認識するに至った経緯を分析することを当初の目的としていた。研究計画では、産業界の一部が煤煙対策技術に対して否定的な評価を収集し、煤煙対策に反対した一方、一部の中産階級市民が煤煙対策技術に対して肯定的な評価を収集し、煤煙対策を求めるネットワークを構築したのではないかとの仮説をたてていた。

【研究の内容・方法】(800字程度)

研究を進めるにつれ、事前に想定していた中央保健庁・地方保健局書簡から煤煙対策を求めるネットワークについて研究を行うことの限界が明らかになった。また、汚染者側の史料として鉄道会社のものを想定していたが、鉄道会社には早い時期から自社でコークス化した石炭を用いることに注目するものがあるなど、一般的な製造業とは別の戦略で煤煙対策を行おうとする特殊な業界であった可能性がある。いずれにせよ、鉄道会社の史料で煤煙問題の記述があるものはそれほど多くなく、鉄道会社の史料のみから汚染者の実態を明らかにすることは難しいことが判明した。

そこで、次に地方都市の新聞を活用して、主要北部産業都市において煤煙問題がどのように争点化したかを調べ、都市によって煤煙問題をめぐる対立の争点が異なっていることを明らかにした。例えば、リヴァプールでは事前の仮説に近い状況があったが、リーズでは煤煙対策キャンペーンへの表立った反発というよりは、煤煙対策を進める衛生委員会のメンバー構成をめぐる対立がみられた。シェフィールドでは産業界の反発が当初から強く、煤煙対策を実行的に進めることが困難だったと考えられる。このように、都市によって対立の様相が異なっていたとはいえ、それぞれの立場で用いられる主張には共通点も見られる。特に、煤煙対策技術や石炭の投入方法に関する関心は共通していた。

この間、別の研究として、ロンドンの水道会社(蒸気機関を使用しており、大量に煤煙を排出していた)の煤煙対策について調査を行い、ロンドンの水道会社では石炭の種類を選択が燃料の節約や煤煙対策上で重要な役割を果たしており、煤煙対策技術はそれを補完する役割を果たしていた可能性が高いことが明らかになった。つまり、煤煙対策技術だけでなく、無煙炭・スティームコール(炭素含有量が高い石炭)やコークスの活用が煤煙対策を進める上では重要だったと考えられる。

【結論・考察】(400字程度)

石炭の種類的重要性にもかかわらず、北部産業都市では主に煤煙対策装置と石炭の投入方法に関心が集中

し、争点もそこを中心としたものになっていた。これは、イギリスの無煙炭・スチームコールが主にウェールズを産地としており、ロンドンやリヴァプールでは比較的入手しやすかったが、北部の工業都市、特に内陸部では近隣の炭鉱からの石炭を利用したため、石炭の種類を選択するということが現実的でなかったためだと考えられる。つまり、ロンドンやリヴァプールと北部の内陸工業都市では状況が異なっていたが、煤煙対策キャンペーン側の主張は全国でそれほどかわりはなく、煤煙対策装置の可能性を意識したものであった。煤煙問題について対策方法の可能性が地理的に異なっていたにもかかわらず、新聞メディアなどの影響から対策方法については単純化された言説が流通したと考えられる。

